

哲学対話の実践者はどう協力して作業できる？ —倫理綱領勉強会の経験と座談会から考える—

桂ノ口結衣、井尻貴子、小川泰治、木下真希、
鈴木径一郎、安本志帆、山本和則（木曜 13 時の倫理綱領勉強会）

「木曜 13 時の倫理綱領勉強会」（以下、勉強会）では、集まりを重ねるうちに、「哲学対話の実践者はどう協力して作業できる？」という問いをめぐるいろいろな謎が出てきた。この問いがどのような意味で倫理綱領とつながっているのか、また大切なのか。勉強会に限らず、今後もしいろいろな哲学対話の実践者と時々一緒に眺めたり話したりしていきたい。あるいは今後誰かがこうした問いに取り組んでいく時の小さな助けになればうれしい。そこで、まずは勉強会で見えてきた謎を共有するため、本稿では第 1 章に勉強会が実際に何をしてきたのかを書き、第 2 章ではそれをどう経験したのかを話し合った座談会の記録を載せる。

ありえる誤解は、この勉強会は「倫理綱領策定に向けた準備検討をする」といった役割を担う組織で、本稿は倫理綱領作成を呼びかけている、という感じのものだ。でも、この勉強会は特定の目標を設定せず、大まかに「一緒に哲学プラクティス等に関する倫理綱領を読む」ということではじまった有志の自主的勉強会で、メンバーどうしで倫理綱領を具体的に作るための行動はしてきていない。関心も、ゆるやかにつながってはいるが、一つの方向に収束してはいない。本稿で座談会という形式をとったのも、個々の問題意識をそのまま示したいと思ったからだ。

なお、第 1 章では便宜的に「哲学プラクティス」と「哲学対話」を呼び分ける。原則的に専門的訓練を経て職能集団（同業者）を持つ中で行なう諸外国の実践を「哲学プラクティス」とし、その実践者を「哲学プラクティショナー」と呼ぶ。一方、基本的にそうした体系を持たずに行なう日本の実践を「哲学対話」とし、その実践者を「哲学対話実践者」と呼ぶ（「哲学プラクティス連絡会」等の固有名を除く）。ただし、第 2 章では各人が異なる用法で語を用いている。

実践の扉

第1章. 勉強会では何をしてきたか

1-1. 勉強会の形態・実施内容

この勉強会は、メンバー全員が互いに話したり聞いたりできる規模感、実質7名（途中参加者2名）の、セミクローズドな会である。2021年6月～2022年3月の間¹、基本的に木曜13時で固定し、当初は毎週、連絡会後からは隔週、2時間前後の定例会を行なってきた。この時間に参加するのが難しく、議事録や資料を読み、Slackでの議論に適宜参加するという形のメンバーもいる²。一人ひとりが生きる身体や状況には常に違いがあるので、参加の方法や程度に必ずギャップはある。「一緒に」や「会」といった言葉はその細かな調整の先にしかないが、そうした言葉こそが、時にそうしたギャップを覆い隠してしまうことに気がつけたい。

定例会で哲学プラクティショナーの倫理綱領等（1-4）を読む中で、内容と並行してそれらの成立過程にも関心が出てきた。この関心は一つには「哲学プラクティショナー／哲学対話実践者はいかに協働しうるか？」という問いとして、2021年9月4日の哲学プラクティス連絡会第7回大会（以下、連絡会）でのワークショップ（以下、WS）開催につながった（1-2）。また一つには、「哲学プラクティス／哲学対話における事例検討とはどのようなものであるべきか？」という問いとして、事例検討の試行につながった（1-3）。

1-2. 連絡会WSの紹介

各国の倫理綱領を読み、例えばそこには「自分やメンバーが違反した場合」に関する項目がほとんど必ずあるという確認を繰り返すにつれ、倫理綱領をつくったり持ったりというのは協働作業であり、コミュニティやメンバーシップが非常に重要だという意識が高まった。そして「資格制や会員制といった明示的メンバーシップを持たない日本の哲学対話実践者の場合、どのように協働していけばいいのか」という問題意識が繰り返し浮上してきた。そこで、この問題意識を共有し、一緒に考え

てもらふ場として、連絡会で「哲学プラクティショナーはどう協力して作業できる? : 「倫理綱領勉強会」の経験を手がかりに」と題したWSを開催した。趣旨説明後、2グループに分かれて「定義の仮説づくり：哲学プラクティスに関する課題を一緒に考えていくべき“みんな”って誰?」と「方法の仮説づくり：実際に“みんな”が活動していく（例：倫理綱領を作る）ために必要なことって何?」を対話する企画であった。このWSを通して考えたことは、2章の座談会で部分的に触れている。

1-3. 事例検討の紹介

哲学プラクティショナーの倫理綱領の成立過程に関する文献は見つけられなかった。そこで、読んできた哲学プラクティショナーの倫理綱領には心理カウンセリングとの関連や対比が感じられるものも多かったことから、一旦、臨床心理分野の倫理綱領の成立過程を参照した³⁾。すると、具体的事例の収集と、倫理問題を扱う委員会の継続的設置という動きが倫理綱領の成立につながったことが分かった。

事例収集と委員会設置という大筋は了解できたが、哲学プラクティス／哲学対話における「事例」やその「検討」とはどのようなものか：事例と呼ぶ時には何が報告されているべきで、その事例はどのように検討していけるのか、といった疑問が出てきた。この点に関しては、事例として書かれた事柄を「事実にデータ」として捉えて実践的な改良点等を探っていくやり方よりも、何をどのように既述している・いないかを著者=実践者の一つの「ナラティブ」として捉え、その思考的なバイアスや特徴を吟味していくやり方を採用すべきと提案するMehuron(2009)⁴⁾の研究がある（また先行実践として、トレーニングにおける実践の検討方法がいくつか参照できる）。

そこで勉強会では、「実践者の思考的バイアスや特徴の吟味」という方向で哲学プラクティスの実践検討方法の手応えを確かめ、「哲学対話の倫理綱領について考える」という文脈で役立つような「事例検討」のあり方を考察しようとした。本稿執筆時点で試行してみた2種類について、

実践の扉

以下でその基本的手順と、加えた変更点等を述べる。

オスカル・ブルニフィエのライブスーパーヴィジョン

フランスの哲学プラクティショナー、オスカル・ブルニフィエが行なう、哲学カウンセリングのトレーニング方法である。哲学カウンセラー役とゲスト役のロールプレイに並行して、哲学カウンセラー役とスーパーヴァイザー（以下、SVR）役の間でスーパーヴィジョン（以下、SV）も行なう（オブザーバーもいてよく、ロールプレイ終了後に質問や感想を述べる）。「ゲストが哲学カウンセリングを受けるために哲学カウンセラーを訪問した」という設定でロールプレイをするが、哲学カウンセラー役は、あらゆるアクション・リアクションを取る前に、SVR 役に「この場面で自分は何をしよう（言おう）としているか」とその理由、例えばゲスト役のふるまいや言葉のどこに注目したのか、どのようなねらいがあるのかを言語化して伝えたり、あるいはその迷いを相談したりする。SVR 役は、哲学カウンセラー役のしようとしていることの意味がその場面に照らして理解できるまで、質問したり提案したりする。その吟味を経て哲学カウンセラー役は何をするか決定し、ゲスト役とのロールプレイで実行する。ゲスト役は、実行された事柄に対してリアクションする。それを受け、また哲学カウンセラー役は何をしよう（言おう）としているかを言語化し、SVR 役と共有して...というプロセスを繰り返す⁵。

勉強会で試行する中で、この基本形から大きく変化した点を3つ挙げておく。まず、哲学カウンセラー役／ゲスト役／SVR 役という構成を、実践者役1人、SVR 役1人の他はみな参加者役とし、場面設定・試行状況を普段の複数人で行なう哲学カフェ等の実践に近づけた。2点目に、実践者役は、あらゆるアクション・リアクション前にSVR 役への共有・相談をするのではなく、基本的に実践者役が（時にSVR 役が）必要と感じた時や区切りだと思ふ場面でロールプレイを止め、SV セッションに入るというアレンジを加えた。このタイミング自体も、「実践者の思考的バイアスや特徴の吟味」という観点から、SV や振り返りで検討され

る。3点目は変化というより前提の違いだが、勉強会では訓練のトレーナー／トレーニーという関係性を持たず、ピアな立場として行なわれた。

NSFP 哲学カウンセラー養成プログラム内のリフレクション

ノルウェー哲学プラクティス学会 (NSFP: Norwegian Society for Philosophical Practice) が哲学カウンセラー養成プログラムで採用している、2ステップに区切った実践検討方法である。Svare(2006)⁶によれば、この実践検討演習は「異なる経験・リフレクションのための席をつくる」練習でもあるという。

哲学カウンセラー役とゲスト役でロールプレイした後、まずはそのペアで「何が起きていたか」のリフレクションを行なう。この段階では、判断を下さずできるだけ記述的に報告することが求められる。「現象学的研究を過去にさかのぼって行うかのように」という説明もあり、客観性の高い精密な言行録を振り返ってつくるというより、2つの異なる立場での経験を共有し、その上で「何が起きていた」と報告しうるのかを検討する作業と思われる。この段階から区切られた第2段階目として、前段の報告に基づき、対話的に理論・倫理・方法等についてのリフレクションを行なう。オブザーバーがいる場合、この第2段階目にリフレクションチームとして参加する。

この方法については、詳細や実例が不明なまま試行したため、勉強会での変更点というより現時点で浮かんでいる工夫案をいくつか挙げておく。第1段階のリフレクションについては、互いの経験を共有した上で「一文をつくる」というワーク風に作業を明確化したり、ネオ・ソクラテック・ダイアログにおける例の共同記述パートを応用したりできるかもしれない。また第2段階は、オブザーバーについて「リフレクションチーム」という語が用いられていることから、ノルウェーの精神科医トム・アンデルセンが提唱した「リフレクティング」をふまえることで、より意義深くなる可能性がある。ほかにも、第1段階と第2段階を明確に分けてリフレクションを行なうという骨子のみを抜き出せば、看護

実践の扉

教育等で使われている「プロセス・レコード」を用いた対話等、別の形式との接続も考えられる。

1-4. 附録：会で参照された倫理綱領やルール等一覧

勉強会では、自動翻訳も使いつつ諸外国の哲学プラクティス関連団体の倫理綱領を眺めたり、様々な場を開いている人たちがどのようなことに気をつけるのが大事と考えているかの表れとしてその場のルールを読んだり、いくつかの論考から学んだりしながら、気づいたことや思ったことを話し合った。当初は漠然と読みはじめたが、途中で「どのような立場から倫理綱領を読むかによって、読み方や気になるポイントが変わるのではないか」という意見が出てきた。そこで、1個1個鵜呑みにせず丁寧に見ていくという意味で、ためしに「自分たちでも倫理綱領をつくってみるとしたら」という観点をとってみることにした。そのようにして定例会で読んだり Slack で共有されたりした資料一覧を、以下リンク先に作成した。 <https://onl.la/RbY1red>



第2章. 「木曜13時の倫理綱領勉強会」参加者の経験

2-1. 小川泰治、木下真希、鈴木径一郎（聞き手：桂ノ口結衣）座談会（2022年1月10日開催）

「倫理綱領」と「協働」は、どう／本当につながってるのかな？

——連絡会でのWSに関して、小川さん・鈴木さんは発表者側、木下さんは参加者側と違う立場ですが、それぞれご感想を教えてください。

木下： 私は参加者として発表を聞き、大会が終わってから合流しました。発表の主眼は「倫理綱領」でなく、「哲学対話について協働して考えること」でしたよね。哲学対話を単にするだけでなく「哲学対話をするということについて、人とつながり共に考えていくにはどうすればよいか」を考えるきっかけとしての発表だった印象です。元々「哲学対話の

本を読むとか、やっている人に声をかけるとかだけでなく、もっとゆるやかにどうつながり続けられるか「何かあった時に声をかけたり声をあげたりしやすくなるためにはどうしたらいいんだろう」といったことを考えていたので、それは自分の関心とどんぴしゃに合ったものでした。

倫理綱領については、最初に発表要旨を見た時は文字のインパクトにちょっとびくっとしたというか、法律やルールのような「上」から押し付けられる枠組みみたいな感覚を持っていたので、哲学対話とはマッチしないという印象でした。その得体の知れなさは（直接「あの発表で」と言えるかは分かりませんが）ちょっと薄れました。またこれまでは正直、哲学対話を狭く捉える立場や主張に警戒心があり距離を取っていましたが、倫理綱領に対しては、つくるかつくらないかは別として、最初から毛嫌いするのでなくまず踏み込んでみて、今であれば勉強会のメンバーと色々議論をする中で、それについての自分の立場を持ってもいいのかな、見つけていけたらいいなと思うようになっています。

鈴木： 発表する主眼は倫理綱領じゃなかったはずなのにミスリードしちゃったなあ、というのが一番の感想です。私は発表の後半、2つのグループに分かれてからのグループ司会の担当でした。その司会の問題もあるのですが、そこではやっぱり倫理綱領の議論が多かった。だから、木下さんのように主旨を真正面から拾ってくれた人がいたというのは救いなのですが（笑）、そのような人は多くなかったという肌感で、「倫理綱領」というワードはやっぱり強すぎた、きついよね、というのが改めて思うところでした。

倫理綱領について、僕は「面白そうな問題だし、関連する文章をとりあえずみんなで読んでみたら自分の勉強になるかもね」くらいの気持ちで勉強会に参加しはじめたのもあり、そういう活動に対して、「誰か（ある種の地位や権威性を持った集団）が決めておしつける」「一部の人間が勝手に何か進めようとしている」感覚というのは一般に持たれうるものだ、ということにまで想像が広がっていなかった。勉強会をやっている

実践の扉

自分から見ると「我々が何かごちゃごちゃ言ったところで何も変わらない」と思っているのだが、傍から見るとそうでないんだろうなとようやく分かってきた感じがします。

小川： 今回の発表では、勉強会で話していくうちに、「誰かが予め決めたものを上からおろしていくのではなく“みんな”で考えつくっていくのが大切だ」「倫理綱領はそれを守ると宣言する組織やコミュニティやメンバーシップとセットじゃないと考えられない」ということについて合意のようなものがとれつつあり、だからこそ“みんな”とは誰のことか？を考えるのがよいのではと行き着いた流れでしたね。だから、私たちとしては「倫理綱領」という勉強会の名前と WS テーマはつながっていたんですけど、そのつながりを説明するというのはけっこう難しいことだったのかもしれないとか、あるいは私たちがつながっていると思っていたことが本当にどれくらいつながっているのかはもしかすると考えないといけないなど、発表したり振り返ったりしながら思いました。

でも、これまでこういう話題は（私に見える範囲での）国内の哲学プラクティスの発表や WS で取り上げられることはなかったし、話し合った中身も大会全体のテーマや主旨と重なる部分があったということで、やったことにも、それを「倫理綱領勉強会」と名乗ってやったことにも、意味があったと思います。

木下： 「倫理綱領」については勉強会でやってきたことの成果発表みたいな形だったけれど、「どうすればゆるやかに協働し続けられるか」は、当たり前ですが会のメンバーの中で答えや解決策が見いだせていなくて、だからこそ連絡会の参加者にむけて問いかけるという形でした。その問いかけが、「動き出してください」という発破かけとして受け取られてしまう感じだったのもあるのかな。だから、「みんなでゆるやかにつながるといえるのはどうすればできるのだろうか？」より、べき・べきじゃないとか、「倫理綱領」と哲学対話のミスマッチについての話とかがすぐ

く出てきちゃったのかなと思いました。

事例検討をすることには、どんな意味があるんだろう？

——勉強会で学んだ具体的な倫理綱領や、それを学ぶ過程について、印象に残っていることはありますか？

木下： 私は、倫理綱領自体はみなさんの発言や資料を見ていく中でエッセンスにだけ触れたという感じで、他の分野も含めがっつりは読んでいません。だから、勉強会で経験した事例検討の話になるんですけど。

やってみると、「事例検討」と呼ぶかは別として、その場で起きた哲学対話について投げっぱなしにせず、ちゃんと振り返ったりそこでどういうことが起きていたのかを改めて解釈したりというのは、「時間があって手間をかける余裕がある人はやればいい」という程度のことではなく、少なくとも自分が哲学対話の場をひらくなら、その場に責任を持つという意味でどんな人でもやるべきことではないかという感じがしています。今まで私は、「今日この人たちとの中でああだった」「どうしたらもうちょっとよかったか」「もっとどういう可能性があったのか」といったメタダイアログは、哲学対話が好きだからやっている趣味や余力の部分という意識だったんですが、そういうことではないんだなと。また、単純に楽しくもあったし、哲学対話をやりたい人のトレーニングとしての意味もすごく感じたところでした。

それで、やっぱりこうした事例検討を続けていくということは、倫理綱領というものの内容の素材になるし、底上げになっていく、という直観としての確信が今のところあります。ただ、それがどうしてかということや、「そんなことやってる暇ないし無理だよ」と言われた時にどれくらい説得力を持って話せるかということは、まだこの会や私の中でははっきりできていないのかな。

鈴木： 僕も印象に残っているのは事例検討です。僕としては「プラク

実践の扉

「ティショナーがひとりで孤立した状態でやってるのはよくない」というのは頭では分かっているつもりだけど、いまいちその実感がありませんでした。その感じが、みんなで倫理綱領の関連資料を読んでみて、その後、事例検討までやってようやく腑に落ちたというか、「孤立してやるよりこういうふうに集団でやってるほうが、確実に自分のためによい」「しかもそんなに辛いことではない、楽である」のが分かりました。

哲学プラクティショナーの倫理綱領を検討したことのほうで覚えているのは、例えば相手の秘密保持であるとか、主に1対1のセッションをするであろうプラクティショナーが身につけていないといけない、カウンセラー的な内容が多いなということ。組織や綱領をつくって相互にチェックするということには、もちろんいろいろ危険がある1対1のプラクティスの質を担保し、相手方に与える被害を防ぐという部分もあるけれど、プラクティショナー自身に自信をつけるという部分もあるのだろうと思います。月のうち何回かはSVを受けたり実践者同士で話し合ったりする機会があり、自分の日々の実践を（監視されている」と言うとはよくないが）見守ってくれているという状態や、自分でもどんな状態になっているのかをある程度モニターして見直す機会があるということは、各人がある瞬間には（例えば1対1の場で）孤立して実践しないといけないにしても、非常に心を楽にするのではないかなと思っている。

そういう意味で、この会も倫理綱領勉強会としてはじまったんですが、私にとって今は哲学プラクティショナーのセルフヘルプグループのような感覚になっていますし、私としてはそれは非常によいことです。ただもう一つ話を進めれば、僕にとっては今そのような感じで機能しているが、今後集団として数が増えたり定着したりして何らかの權威性のようなものを持つてしまうと、例えばそこでの事例検討も心の支えというより「受けなきゃ」という研修や義務のようになっていくとか、途中から入ってきた人にはそういうふうには伝わらないとかの可能性はあると思っています。もしそこまでいけば、入る動機としても、学びとか心の支えというより「これで履歴書に一行書ける」みたいな形式的な機

能のほうが重要になるとか。そういう意味で、自分は非常にいいタイミングから参加させてもらったなと思うし、どれくらいセルフヘルプグループ的な性質のまま存在できるのかという疑問も今は生まれています。

小川： 事例検討について言うと、私はどちらのやり方（1-3を参照のこと）のときも、SVRやカウンセラーなどの役割に当たっていて、お手本がない中でもがいていた印象なので、まだ興味深かったのかとかあれがなんだったのかとか、うまく振り返れていない面もあります。すごく疲れた！という印象が強いかな。

それとは別に鈴木さんのお話を聞きながら思ったのは、確かにこの勉強会は、フォーマルではないしかたである種の自助的な助け合いとして機能していた感じがするし、それが「倫理綱領勉強会」という形ではじまったというの何か示唆的でおもしろいなということ。うーん、ただ倫理綱領みたいなものを持つには、もう少し権威性やフォーマル性を宣言していくことがどこかで必要になっていく気がして。でもそうなった瞬間に、ある種形骸化してしまったり大切にす理念から逸れたりといったことが生じるとも思います。実践者同士がピアでインフォーマルに交流したり学び合ったりする事例検討会のような仕組みをコミュニティメンバーで維持しつづけることと、倫理綱領を持つこと、この二つのことがうまくどちらも機能できれば、フォーマルとインフォーマルの隔たりのようなものがないようなしかたでいけるんじゃないかな。

倫理綱領を「つくる」と「考える」のちがいは？

——倫理綱領や今後の展開について考えていることを教えてください。

木下： 事例検討は「やってみたら自分たちはどう感じるだろう」という目的で試してみたと思いますが、私としてはやってみて、さっき鈴木さんが言っていたみたいに、「一人で孤独にやるのではなく、ゆるやかに誰か他の実践者とつながって共に事例検討をするということの中に必

実践の扉

ず価値は出てくる」という感覚を持ちました。なので今後やってみたいのは、別の場でやった哲学対話について何らかの記録をして場に持ってくることです。それができれば、よりゆるやかに協働し続けることに寄っていただけるのではないかという気がしています。

鈴木： 倫理綱領については、まあ必要なのかもしれないけど、今はそんなに急がないで、参考に色々調べるくらいでいいかなという気がしています。哲学対話を職業にする人がもう少し増え、社会的要請として「考えてもらわないと困る」ということになれば、学会等で委員会を立ち上げ、「考えたい」以前に「考えざるを得ない」という状態でガッと決めることになるんじゃないかな。私としては、ずっと考えはするんですけど、「決めたい」というニーズはないです。

木下さんの話を聞いていてもおもしろかったんだけど、この会では事例検討とかも、「やらなければいけない」でなく「やってみたらどうなるんだろう」「やってる哲学プラクティショナーもいるみたいだけど、自分たちでやってみたらどんな感想持ただろう」というレベルからはじめられました。「委員会」というのは必要に応じて誰かに委ね、「期日までに決めてくれ」というところがある。でもその意味でここはそうじゃなく、やっぱり勉強、研究する会ですよ。

その気楽さも僕としてはよかったし、根本的にはそういう研究をずっと続けられるということ自体が質を担保していくところがあるだろうと思っています。それによってフォーマルに何かを決めることの必要性がなくなるわけではなく、底上げができるだろう、と。私としては、こういうふうに「これが使えるんじゃない」「この辺が実は重要なんじゃない」みたいなことをどんどん実験、研究できる場が存続できればという方向で、今後についても考えています。

小川： 倫理綱領については、鈴木さんと似たようなことを考えていて。いくらでも立ち止まらないといけないことが出てくるから、期限を切ら

ずに考えていくのは難しい。「対外的に持っていないとやばい」という中で、学会や協会のレベルで「委員会を立ち上げ、半年後までに総会に議案として提出して承認を得ないといけない」みたいなものがあるから決まるんだろうなと思っています。

今の時点でも、団体との関わりでもう少し期限を切られている感覚のある人たちもいるかもしれません。かくいう私もこども哲学おとな哲学アーダコーダという NPO 法人の理事なのですが、それだけで食っているという意味での職業ではなくとも相応のお金をもらっていたり認知度があがっていたりという意味で、期限を切られているという感覚もちょっとあるように思います。その意味で、一方では勉強会や研究会で底上げをしていきながら、もう一方では、ここ数年のうちに「決める」というフェーズが来ているのだろうという感覚があります。

ただ倫理綱領の文面自体は、実は「つくってしまおう」というときには、細かな調整はあるにせよほとんど形式的に書いていくことになるだろうと思っているので、そこではなくその前段階、どういう人たちとどういう組織体制で宣言していくかが重要なのだと思っています。さっきも言ったけれどピアサポーターに振り返り等を重ねながら一緒にレベルアップするということと、倫理綱領を宣言するような組織的なあり方というのは、油断するとどんどん乖離していってしまい、倫理綱領も機能しないものになっていってしまう。だから、インフォーマルなものとフォーマルなものがどうやってつながっていけるのかという観点から、組織や会のあり方や、トレーニングのあり方に関する事例や論を勉強していくことに、私としては関心があります。

続いているものの中に本当に入っていき／受けとめるって、どうすれば可能だろう？

小川： この勉強会でも、倫理綱領的なものをつくるには何らかの組織やメンバーシップ、コミュニティがある程度確立されているのが必要だろうことや、メンバーシップには一緒に哲学プラクティショナーになっ

実践の扉

ていくというような何らかのトレーニング的なものが関わっているだろうこと、そういう倫理綱領とメンバーシップとトレーニングの関わりについての話が、何度も何度も出てきていたというのが、自分にとって大事な気づきや理解として印象に残っています。それを日本の状況と照らし合わせた時に何が違うのかや、日本の状況がある種特異な感じがするというのも、よく話のポイントになりましたね。

木下： 私が参加してからの3ヶ月も、同じことを、別の形やプロセス、方法をつかって確認している感じがありました。同じことをぐるぐるやっているとより、どういうやり方をしても「やっぱりこれって大事なんだよね」「やっぱりここがネックだよね」と何度も同じところがリフレインしていくというか。哲学対話を実践するということで絶対ぶつかる壁とか、「気をつけないといけないところだ」とメンバーの中で合意しやすい部分が浮き彫りにされていったような感じでした。

——メンバーシップという点に関連して、この勉強会のようなセミクローズド性はどれくらい本質的に大事なのかも気になっています。

木下： 後から合流した身としては、知っている人半分・知らない人半分くらいのセミクローズドだったということにも安心感がありました。誰が誰か分からない、スパイや敵かもしれないというのではなく、「立場や意見が違っても傷つけられない」という安心感があって、自分も本名で参加するという場だから行こうと思えたということはありません。知らない人しかいない、できあがっているところに潜り込むような緊張感やこわさとはちょっと違います。

鈴木： 僕は、実践していればみんなある意味似たような経験を持っているということはあると思うので、初対面の人でも「馴染み感」のようなものは既に感触としてあります。だから、実際に実践してみてそれに

ついてしゃべる、みたいなことならある程度初対面同士でもできるんじゃないかな。ただ作業が「倫理綱領について詰めていく」とかだと、同じような馴染み感を感じられるかどうかは分からない。

それから、先程の木下さんのリフレインの話に関連して、僕ははじめて学生として大阪大学の臨床哲学研究室に入った時、「ずっと同じような話してるな」「ずっと停滞していて、何も決まっていない」という感覚を持っていました。でもやる側になってみると、「これは検討すること自体に意味を感じているから、問題ないんだ」と思いました。フォーマルに決めるということが課題になっている場合と、ずっと付き合っていないといけない問題との付き合い方を考えたい場合とではやる作業が違って、ピアでインフォーマルに学び続ける場においては、同じような話が何回もあらわれるということに意味があるのかもしれない。でも急に外側から入ってくると「この人たちが何のためにずっとこの話し合いをしているのか」が分からない、ということがありますよね。それから、ある団体に似たようなタイミングで入ってきた人が多いと、似たような学習をしていくから、関心が同じように先へ先へ進んでいく、ということもありそうです。そちらについても、やっぱり急に入ってきた人には分かりにくいだろうと思う。

だからどちらの意味でも、新たに入ってきた人をどうしたら本当にその場にちゃんと受けとめられるのか、そもそもそれは可能なことなのか、というのは気になります。

小川： 倫理綱領にしても、決める作業に関わる1期生メンバーみたいな人と、それ以降にそこに加わり、できあがったものに付いていく人とは、理解や見え方がやはり違うんだろうな。つくる過程に意味があるんだとすれば、誰かがつくったオープンレターに署名するみたいな形で本当にいいのかどうか。毎回毎回何期生みたいな人が決め直すとか…。いや、でも、ちょっと倫理綱領にいろいろな意味をこめすぎなのかもしれないとも思います。倫理綱領は、形式的に署名して「守ります」でい

実践の扉

いのかもしれない。

けど、この勉強会でやっぱり印象深いのは、倫理綱領をつくる過程にこそ最も意味があるということ。だとすると、その一番うまみのあるところを多くの人に手渡していくのは大変なことで、うーん…。今も国内の哲学プラクティスでは、世代差でいろいろと見えているものが違う、温度差があるという課題がありますが、倫理綱領をめぐるでもまた同じような課題が見えてくるのかもしれないなと思います。

木下： 会の形ともちょっと関わるところかなと思うのですが、セミクローズドな少数の人たちの中で安心して、期限も決めずじっくりと、でもその中にいる人たちだけでなく周りにいる他の人たちのこともふまえて考える、ということに取り組めるからこそ、自分たちがつくったものを次の人たちに「PDF じゃなく Word の形式で渡す」というか、吟味を託したり手放したりできるのかもしれないな。(了)

2-2. 井尻貴子、桂ノ口結衣、安本志帆、山本和則座談会（2022年1月11日開催）

「倫理綱領に関心がある」ってどういう意味？

——連絡会でのWSについて印象に残っていることを教えてください。

山本： 当日の発表はオブザーバーに近い関わりでした。他の方も言っていたと思いますが、やっぱり倫理綱領が必要かどうかには話が集中してしまい、なぜこのWSを開くにいったかという背景の共有がうまくできなかったという感想です。逆に言うと、ボトムアップ的な問題意識ではじめたWSでしたが、「倫理綱領を検討する」というのは、やっぱり何らかの権威性がどうしてもつきまどってくるという難しさのある問題なんだなと改めて思いました。

井尻： 「哲学プラクティスに関わる人たちの有志が一緒に何かをしていく場をどういうふうにつくれるか」ということをWSのテーマとしたつもりだった。その「一緒に何かをしていく」ことの例が「一緒に倫理綱領を読む」というものだった、ということなんだけど、「倫理綱領」ってやっぱり強い言葉なんだなと改めて思っています。その言葉の強さもあって、プログラム紹介の時点で倫理綱領を中心とした企画だと印象づけてしまったのかもしれない。要は、WSに参加された皆さんの関心は「倫理綱領」にあるのに、それよりも関心が低い「勉強会」についていくら話そうと言われても「ちょっと乗り切れないよー」という感じだったのかな、というのが率直な感触です。せっかく倫理綱領について考えたい人たちが集まっていたかもしれないけれど「そっちについては考えない」という仕立てになってしまった。それをふまえてWS直後に思ったのは、倫理綱領について考えるWSもやればよかったかもな、ということです。「哲学プラクティスに関わる人たちの有志が一緒に何かをしていく場をどういうふうにつくれるか」ということは、それとは分けて、考える場を設けたらよかったのかもしれない。

安本： WSに参加しながら、当日の発表では「倫理綱領をつくろう」なんて誰も言わなかったのに、いくら訂正しても『倫理綱領をつくらな」といけな』という思想をもって取り組みはじめるための会」について話す場だと捉えている人もいそうな感じで、「なんでかな？そこじゃないんだけどな？」とっていました。それで、さきほど井尻さんがまとめてくださったことを聞いて「ああそうか」と思いました。

内容で言えば、参加者の一人が「倫理綱領というのは職業として設けるものだから、そもそも哲学プラクティスを職業化するのかどうかをちゃんと話さない」とみたいなことをおっしゃっていて。海外と日本の哲学プラクティスでは職業性が違う気がするし、まだまだ日本の哲学プラクティス実践者はそれで食っていけないですが、「哲学プラクティス」が人びとに浸透して「名前くらいは知ってる」という社会になっていきつ

実践の扉

つある中で、「それを職業として確立するべきか」というのは、少なくとも哲学プラクティスを長くやっていたりお金をもらってやっていたりする人たちの間で考えていってもいいテーマではないかと思いました。

桂ノ口： 確かに倫理綱領に関心のある人がたくさん来てくださったと思いますが、その「関心がある」にも様々なレベルがあって、議論に入っていきたいという感じの「関心」だけでなく、単純に情報として知れば落ち着ける類の「関心」も一定数あったのかなと思います。WS終了後も倫理綱領の項目例を紹介することになったので、そういう関心に対しては私が担当した説明パートでもう少し工夫をすればよかったです。倫理綱領を議論していくことへの関心については、じゃあ現実的には「議論」って一体どうやって可能なのかということで、やっぱりWS主旨に戻ってくるという感覚もあります。

山本： 「倫理綱領に関心がある」といっても具体的にどのような意味なのか、私も含めみんなまだ言語化できていなかったり話せていなかったりしますね。倫理綱領には、「権威性のある組織が存在し、そこが策定する」「自分たちが知らないところでつくられて天からおりてくる」ような感覚がある気もします。倫理綱領にまつわるイメージというものを、もう少し気にしたり考えたりしないといけないのかなと思います。

「一緒に勉強する」ってどんなこと？

井尻： 昨日の座談会の議事録を読み、そこにあった鈴木さんの発言記録などから思ったことなのですが。私は連絡会までは権威性についてあまり考えていなかったのですが、連絡会を経て「そういうふうにつえられることもあるんだな」と思うようになりました。その権威性というのは、一つには関心の高かった「倫理綱領をつくる」ということにあると思うのですが、もう一つ、「哲学プラクティスに関わる人たちが有志で何かしている」ということ自体も、誰かにとっては権威的に映ることがあ

るんじゃないかなと思っています。

私や鈴木さんの最初のノリって結構似ていて、「ああ、一緒に何かできるならやりましょう」「倫理綱領については全然知らないから一緒に勉強しましょう」とはじめて、好きなことを好きに言い合っている、くらしいの感じです。だから「ここには何の力もない」「ここで何か言っても何も変わらない」（もし本当に変えようと思ったら、そのために運動をするとか事業化するとか動き出すことはできるかもしれないけど、それを目的としてはじめていない）と思っている。でも外から見ると、「自分たちが関わっている哲学プラクティスについて、勝手に何かしようとしている」ような感じに見えちゃうところもあるのかな。

山本： まずこの会に集まっているメンバーはそれなりに実践の経験をしている人たちであり、かつ何かを考えたいという時に集まれる色々なリソースがある。そういうところに何らかの権威性を感じることはあるかもしれない。経験やリソースについての非対称性といったほうがいいかもしれないですが、これが広くルールとして「これを守りましょう」と呼びかける倫理綱領というものの性質とあいまって、なんらかのメタメッセージを発していたような気はします。

井尻： 倫理綱領というものはすごく強いんだなと改めて感じましたが、逆に「哲学プラクティスに関わる有志が集って勉強したり考えたりすること」に関心がある人っていうのはどれくらいいるんだろう？というのもふと思います。テーマが「倫理綱領」じゃないとしても、一緒に考えたり勉強したりしたいと思うのかな？とか。そこへの関心は、全員が全くないわけではなくても、少ないのかもしれない。

哲学プラクティスに限らず、「レクチャーを受ける」「何か習う」といった情報や技術の伝達、習得ではなく、「ディスカッションする」「ネットワークをつくる」みたいにお互いに何かしていく場を維持することに対しては、お金を出す人が少ないという印象もあります。「勉強会」「ネ

実践の扉

ットワークづくり」に前のめりになる人が少ないというのには、こういう点も関係しているのかもしれませんが。例えば倫理綱領についても、「勉強してるんだったらそれについて教えてほしい」というニーズのほうがあるのかな。

桂ノロ： 「みんなで勉強する」ということについては、イメージできるかという問題もあるかもしれません。私は昔、今とは別の大学にいて、そこでは少なくとも自分の身近には「読書会」という文化がなかった。だから当時、人から「読書会をする」という話を聞いた時には「読書会って何？」とびっくりしました。読書って一人でするものだと思っていたし、「人と一緒に読むと深まる」的な説明を聞いても意味が分からなくて。そう思うと、「読書会」「勉強会」と聞けば何となくイメージができるというのは、いつの間にか自分が持っている特権です。だとしたら、「勉強会」についてももっと具体的にイメージが共有できるよう工夫して、その上で初めて関心があるかどうかという話になってくるのかな。

山本： 確かに「勉強会」や「読書会」のイメージ自体、必ずしも共有されているとは言えないですね。大学とかで実際に経験したことのあつる人は、単に本の内容を読むという以上のメリットを体験的に知っているけれど、まずそういうイメージがなければやっぱりそこにアクセスしづらいのだろうな。これは哲学プラクティスに関わる人の協業というものを考える時、もっと気にしないといけないところかもしれません。

井尻： 自分の中では「勉強会」って、例えば「これを維持するために一人いくらか出しましょう」となっても出す価値があるものだと思います。それはどうしてだろうと思うと、やはり他の人たちの意見ややっていることに刺激やヒントをもらえたりして、自分一人では気づけないことにも出会えるからです。

例えば、研究室なら研究室、団体なら団体に所属していると、ネット

ワークというか、何かを一緒にやるから連絡を取る必要のある人ができてくるけれど、そうすると今度は中でだけやり取りするようになってっちゃう。単純に閉じたくないというのものもあるし、日常的にやり取りしてる人たちだけで何かしていくと、内部では「いいこと」としてやっけていても「本当にそれでいいのか」って俯瞰できなくなっていくというものもある。だから、それぞれの場所で活動している人と一緒に勉強したり、積極的にやり取りしたりできる場合は、本当にありがたいと思っています。

哲学対話の実践者同士って、なんでつながるのが難しいの？

山本： 倫理綱領以前に、日本の「哲学プラクティス」（とりあえずカッコ付きのものとして）実践者は、個人商店みたいなイメージがあります。個々人がよく言えば自立的、悪く言えば孤立していて、対話を重んじているはずなのに深いところでつながれていないのでは、という感覚がこれまでありました。それがなぜなのかと考えていくと、「哲学プラクティス」が既存の体制等から離れて自ら考えることを大事にしていることや、「自由に、一人でやってもいい」としてきたことと関わっている気もするんです。カフェフィロや連絡会に関わっている身としても、みんな実践にまつわる何かを合意したり、協業したりするのが本当に難しいと思っている。何かを一緒にすることそれ自体、他の活動でも難しいことですが、哲学プラクティスのフィールドだと何か違う種類の難しさがあるようにも感じています。

井尻： 他でやっても難しいけど、特有の難しさがあるというのは分かる気がします。私は「哲学プラクティスをやっている人たちのつながり」みたいなものは、もう自然発生的に発生しているんだ、と思ってしまうところがあります。私の中で、哲学プラクティスをはじめようと思った時に、独りではじめて続けていくことはなかなか難しいんじゃないかと思うところがあって。はじめた、という時点である種のつながりが持てたら、孤立せず、凝り固まらず、続けていけるんじゃないかな、と。で

実践の扉

も、その自然発生的なつながりは、そんなに強いものではない。つながりの中で何かしていくことによって強くなるのかもしれないけれど、それよりも自立していることを大事にしている人や活動も多いのかな。

山本： 井尻さんがおっしゃった感じはとてもよく分かります。同じような活動をやっていることで自然とうまれる共同性というのは、哲学プラクティスにおいても既にあるんですけど、倫理綱領に限らず何かの課題を検討するとか一緒に勉強していくとかいう時には、また別のつながりが必要だと思うんですね。①例えば連絡会参加者くらいのイメージで、同じ活動をしているからということで結構な数の人たちが何となく有しているつながりと、②プラクティショナーとして何かを一緒に勉強していくような時に必要になる「本当に一緒に何かをやる」というつながりの2種類があって、このつながり②のほうの持ちづらさを僕はずっと感じているということです。もちろんこれは個人的な感覚ですし、私自身の問題も含まれると思っていますが。

安本： 「つながりの中で何かしていくことよりも自立していることを大事にしている人や活動も多いのかな」という意見については、私は逆に、東ねられた人が多いというイメージを持っていました。自分で「**カフェ」と名乗って SNS 告知はできるけど、だからといって例えばこの倫理綱領勉強会が「誰でもどうぞ」と言っても、このメンバーを見ると権威性を感じて「自分には行けない」と思う人、そして、でも「一緒にやろうよ」と声をかけられるのは待っている人というのは、結構多いという肌感です。私はそういう人たちの顔がぱぱと浮かぶという意味で、「一緒にやる」のを望んでいる人たちはいる気がするのですが...私の話は、ずれているでしょうか？

井尻： ある程度何年も自分でやってきている人たちは、やっぱり自分のやり方とか考えがある。それぞれに違いがあるままで活動することな

らできるけど、その違いをなくすとか、新たな合意点を探してまで一緒にやる必要はない、と思うこともあるかもしれない。例えば私はアードコーダという NPO で活動していますが、そのメンバーの哲学対話観にも違いがあると思いますし、そこを1つにしようとなったらすごく時間がかかると思います。あるいは、実現しないかもしれない。そもそも、1つにする必要があるのか、というところから議論が必要でしょうね。

安本： ああ！今のでどの辺の話をしているのかが分かりました。昨日今日はじめたとか、オンライン化してからはじめたとかの人を想定していましたが、そうでない人の話であれば、確かにやりづらいですね。そこだとしたら、思ったことが2つある。

1つは、年数が経てば経つほど「自分は何を大切にしているのか」ってクリアになってくるから、それが明らかに違くと「一緒にやりたくない」という気持ちが芽生えるというのがあると思うのね。

もう1つは、ブランディングの話。研究ポジションを持っていない在野の人は、職業にするかどうかやお金がどれだけ稼げるかが絡んでくると特に、「自分は違うんだ」「ああいうのと違って私はこうです」と差別化しないと生きていけない感覚があるんじゃないかな。

井尻： 連絡会とかで顔を合わせるチャンスはあるし、そこで別に仲が悪いわけでもない。でも、山本さんの言う「つながり②」が具体的にはなりにくい。それがどうしてなのかはまだよく分からないけど、一つには、安本さんがおっしゃったみたいに、長くやっていくうちに「何が大事か」「何がゆずれないか」の核ができちゃってるからこそ、その部分を変えるのは難しいし、変化するにもすごく時間がかかるのかもしれない。変化させることが必要なのか、良いのかもわからないですが。さっき山本さんがおっしゃっていたのはもう少し別のニュアンスですか？

山本： 今、井尻さんがおっしゃったことにかなり近いです。多様であ

実践の扉

るということは確認できるし、議論はいくらでもできる。でも、いざ何か課題に取り組むという時にも「多様である」というアプローチしかとれず、合意をした上でやっていくのが難しい。これは、カフェフィロやアーダコーダに限らず、かなり広くある問題のような気もしています。

自分の実践について他の人からいろいろ言われるのってやだ？

井尻： 倫理綱領に話を戻すと、「倫理綱領」という言い方じゃなくてもいいけど、「哲学プラクティスをやる人たちが気に留めておきたいことながら」みたいな一覧があれば、私だったらすごく参考になるなと思います。「倫理的でありたい」「よきプラクティショナーでありたい」と思っても、その「倫理的である」「よきプラクティショナーである」とはどういうことなのかって、自分ひとりで挙げられるという自信を持ったらいけない部分の気がする。マイクロアグレッションのように、自分では気づけないこともたくさんある。そういう意味で、権威化や職業化とは全然別の話として、単純にそういう一覧みたいなものがあると、自分だったら参考になる。

安本： 私も今、井尻さんがおっしゃったのには同意するんだけど、ただ「こういうのがあるよ」と誰かに知ってもらおうとする時に難しいと思うことが2つあって。1つは、「自分は『できていない』と見なされて攻撃された」と捉えてしまい反発してくる人も、「自分には関係ない話」と見なす人も一定数いるだろうなということ。さらに2つ目として、『『こういうのがあるよ』』と言っている私自身にもこれは当てはまることなんだ、私もできていない」といくら言っても、上から言ってるかのように思われてしまう難しさもある。いくら気をつけて自分の失敗例をいっぱい出したり、「私は」を主語にしたりという工夫をしても、ある種の人にはそこがどうしても共有できない。

こういう難しさがあるのは、「誰でも気を抜いていると差別してしまう」というのが本当に知られてないからじゃないかな。「差別をする人は

悪い、しない人は素晴らしい、そして自分は差別をしない」というごく単純な理解で留まってしまっているのが社会の現状で、そうじゃないよねという前提での差別の話は、まだごく狭い範囲でしかされていない。

井尻： その話を聞いて気になったのは、それは「差別」や「倫理」の話だからこその反発なのか？それとも、さっき山本さんが話していた「つながり」みたいなものをそもそも必要としていないとか、あるとは思っていないから出てくる反発なのか？というところ。

山本： うーん、両方かな。まず、「差別」や「倫理」を問題にする際の反応は哲学プラクティスに限らず一般によく似ていると思います。例えば男性が「男性特権について考えよう」と言った時には、やっぱり自分のこととしていくら語っても反発が返ってくるという、同じような構造がある。これはさっき安本さんが言ってくださったような「差別」というものの捉え方の問題もあるし、「倫理」というものが一般に自分の見えていないところに呼びかけてくるものだから、ということもあると思うんですね。自分に見えない脇を突かれることへの抵抗感というか。

もう一つ、哲学プラクティスに関わる人たちが、自分の活動ややっていることについてあれこれ言われることに単純に慣れてない（笑）というのも根本的にあるのではないかなと思っています。

僕も、この勉強会での事例検討としてファシリテーターをやってみた時、やってみるということやそれを吟味されるということに対して、ハードルやこわさを感じたところがあります。それってやっぱり、そういうことをやってこなかったからだと思うんですね。実際にやってみると、別に「やってみてよかったな」と思うんですけど、はじめはハードルがある。自分のことで考えてみても、これって何なのかな...慣れてないだけなのか、プライドみたいな問題なのか。

真の「safety」はそうではないと思いますが、そもそも自分の意見や行動をあれこれ批判や吟味されるのがいやだからということで「safety」

実践の扉

を大事にしているということも自分の中でありそうな気がしていて、最近では批判を歓迎できる態度というのが本当に大事だな、それをやりたいなど思いはじめています。

安本： 揚げ足取られるような感覚があるのって、私は自信のなさの裏返しかなと思ってて。批判を歓迎できる態度を持つてる人は、ちゃんと本当の意味での自信を持つてるというか。だから「いいことも悪いことも言ってほしい」という人と「言われたくない」という人には、結構な温度差があるんじゃないかな。長く哲学対話をやってきた人の中でも温度差があるとしたら、そうじゃない人達には尚更なのかなと思いますね。

桂ノ口： 私は言われるのがこわい。さらに自分の思考の癖も混じったまま正直に言えば、言われるのはいいとしても嫌われたくない。哲学をやっている人の批判って根本的なところを見ていることも多いから、言ってもらって知れるのはありがたいんだけど、でもそこに欠陥を見て取られたら多分その人との関係は終わりだ、とこわくなってしまう。「意見が合わなくても一緒にやっていこう」みたいなことはよく聞くけど、それを本当に実現できることだと信頼できていない感じがあります。

井尻： 私も言われるのはこわいし、いやだなとは思いますが(笑)。悲しくなるし、すごく気をつけてやっていたとしても、いろいろやっているだろうし。でも一方で、そうだよな、言われてもしょうがないよなとも思っていて。開き直っているわけではないんだけど、「完璧な進行なんてできないだろうし、それがいいのか、どういうものなのかもわからない」と思っている。逆に、自分は完璧だ、とは思いたくない。今の最善は尽くすし、それがその場にいる人たちの最善でもあるように努めるけれど、及ばないこともある。関わりの中でいろいろ起こる、そのいろいろを受け止めるしかないし、そこから学ぶしかない。その意味で、桂ノ口さんがおっしゃった「意見が合わなくても一緒に何かやっていく」ことがで

きると信じたいなあとは思っています。

安本： 私は穴だらけの自分の思想や論をさらけ出すほうが恥ずかしいから、クリティカルな批判を受けて改善しないと堂々としていられないところがあって、指摘してくれる人がいるのに聞かないというのはあり得ない。言われるとそりゃ一時的には傷つきますけど、痛いのは正しいと分かっているからであって、痛くなけりゃ反論すればいいだけの話だから。「もっと知りたい」「これを学びたい」みたいな思いが強いほど、クリティカルさに対して寛容になれるのかな。

倫理綱領に関して、あなたが今考えてみたい問いは？

——倫理綱領に関連して、今後考えてみたいことなどを教えてください。

井尻： 機関紙『みんなで考える』にしても、何か勉強していく時にはやっぱり山本さんの言うつながり②みたいなものが必要だよ、という仮定の上でできてるものだと思います。でも、「つながり」を必要としない人も本当はいるんじゃないか？ってという話も出てきて。そうだとすると、そういう人たちとも一緒に何かするのかしないか、という判断も今後避けられないのだと思う。もしそこで「そういう人たちとも一緒にやっていく」となったとしても、「つながり」を押し付けるというのではない方向で一緒に何かするっていうことは可能なのか。まだはっきりとは分からないけど、例えば同じ場を集って議論するとかじゃなく、「そういう存在がいる」ってことを一方的に意識しておくだけでも多少は「一緒にやる」になるのかなとか、そういうことを考えてみたいです。

山本： 倫理綱領を最終的につくったほうがよいかどうかについては、まだ自分の意見がまとまっていません。ただ、「倫理綱領をつくる」ということは、哲学プラクティショナーの協働性や組織化といった部分と切り離して考えることができない問題だなあとやっぱり思っています。

実践の扉

その議論も大事なのですが、「倫理綱領」というより「倫理」について、どういうことに気をつけないといけないかといったことの情報交換をしたり、個々の実践の中で倫理をどう考えていくのかという具体的なレベルの話が今後できたりするといいなと思っています。

それから、「哲学プラクティス」が日本においては草の根で、ある種の反権威と結びついて広まっていった面は無視できないと思っています。そこで出てきた課題をどう乗り越えていくか考えるには、例えばフェミニズムや障害者運動など、他の草の根の社会運動が辿ってきた歴史や文脈から学ぶことは多いと思いますし、学んでいきたいと思っています。

安本： 今日の「哲学プラクティショナーがつながりにくい」という話の中にももっといろんなトピックがありそうだし、クリティカルなものに対する態度やマインドの話も色々な個人差がありそうでした。その中で、「こうあるべきだ」みたいなちょっとした思想が権威と結びついたり、外部的な目線で結びつけられたり、一緒に何かやるとなると温度差や能力差で難しさがうまれたりするから、やっぱりすごく難しいなと思います。「哲学プラクティス」に似た学問分野、似た領域って他にどんなのがあるんだろう？と考えながら聞いていました。

桂ノ口： 私は、山本さんがおっしゃっていた「個人商店」「自立」というのが元々すごく下手です。そして、哲学対話の文脈ではそれが苦手な自分がずっとすごく恥ずかしかった。でも、その苦手さや恥ずかしさって何でどうすべきなのか、よく見てみようと思います。「批判を受ける」ということについても、批判の後に時間をかけて立ち直ったり改善したりしていくところまで「やってみるから見てね」「私いろいろあかんけど仲間でいてね」ってもしかしたら思ってみてもいいのかな。今はまだ哲学対話関係の誰に対して思っているのかもよく分からない感じなのですが、何かそういう自分の中で封印してきた部分にも考えていくヒントがあるかもなと思いました。(了)

注

- 1 この形態での会は 2022 年 3 月で一旦解散予定 (2022 年 2 月現在)。
- 2 第 2 章の座談会が 2 日に分かれているのも、日程調整の結果だ。
- 3 アメリカ心理学会編 (佐藤倚男・栗栖瑛子訳)『心理学者のための倫理規準・事例集』(誠信書房、1982) や田中富士夫「心理臨床家の倫理」、小川捷之・本明寛・鏑幹八郎編『臨床心理学大系 (第 13 卷) 臨床心理学を学ぶ』(金子書房、1990) を参照のこと。
- 4 Kate Mehuron, "Supervision and Case Notes in Philosophical Counselling Practice", *Philosophical Practice Journal of APPA4* (2), 2009: 467-474.
- 5 ゲストと哲学カウンセラー間でのセッションの流れを失念しないよう、その発言内容は板書しておく。
- 6 Helge Svare, "How do we best educate philosophical counselors? Some experiences and reflections from the Norwegian educational program", *Philosophical Practice Journal of APPA2* (1), 2006: 29-39.

謝辞：勉強会は何らかの支援を受けて実施しているものでなく、有志が自主的に開催している。ただし、メンバーの桂ノ口は「第 13 回未来を強くする子育てプロジェクト」の助成を受けて研究してきた。桂ノ口が担当した第 1 章部分は、その研究をもとに執筆したものである。